PORTFORIO

TAISEI FURUSAWA

CONTENTS

1. PROFILE 3

2. WORKS

卒業設計
生き続ける土地の記憶　- 日本酒造りの再興と街の記憶のアーカイブ - 5

2020 年　日本建築学会設計競技
乾杯　- 酒蔵を中心としたつながりの提案 - 31

第 23 回 ぐっとずっと。エネルギア住宅作品コンテスト
INNOVATIONAL VILLAGE 45

3. THESIS

卒業論文
ル・コルビュジエ・センターの制作過程から見た生活空間の構成 55

4. PROJECT

建築論研究室　模型製作プロジェクト
菊竹清則　山陰と建築 59

古澤太晟　Taisei Furusawa

PROFILE

Biography

1997.12	滋賀県蒲生郡竜王町生まれ
2013-2016	滋賀県立膳所高校 卒業
2017-2021	島根大学総合理工学部　建築・生産設計工学科　卒業
2021.4~	島根大学自然科学研究科　環境システム学専攻 建築デザイン学コース　建築論・千代研究室

Internship / Opendesk

2018.9	寺本建築・都市研究所
2019.3	studio velocity 一級建築事務所
2019.3	SUPPOSE DESIGN OFFICE
2021.8	三分一博志建築設計事務所
2019.10~	原浩二建築設計事務所

Award

2021	広島平和祈念卒業設計展 2021　優秀賞
2020	2020 年　日本建築学会設計競技　中国支部入選
2019	第 23 回 ぐっとずっと。エネルギア住宅作品コンテスト　佳作

Skills

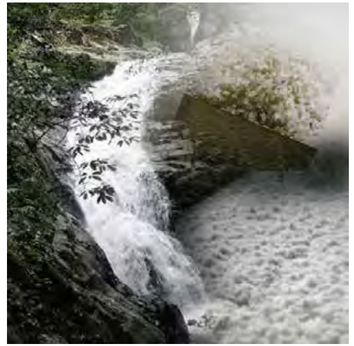
2D vectorworks, Autocad **3D** sketchup **BIM** Archicad **CG** Lumion, illustrator, photoshop

生き続ける土地の記憶

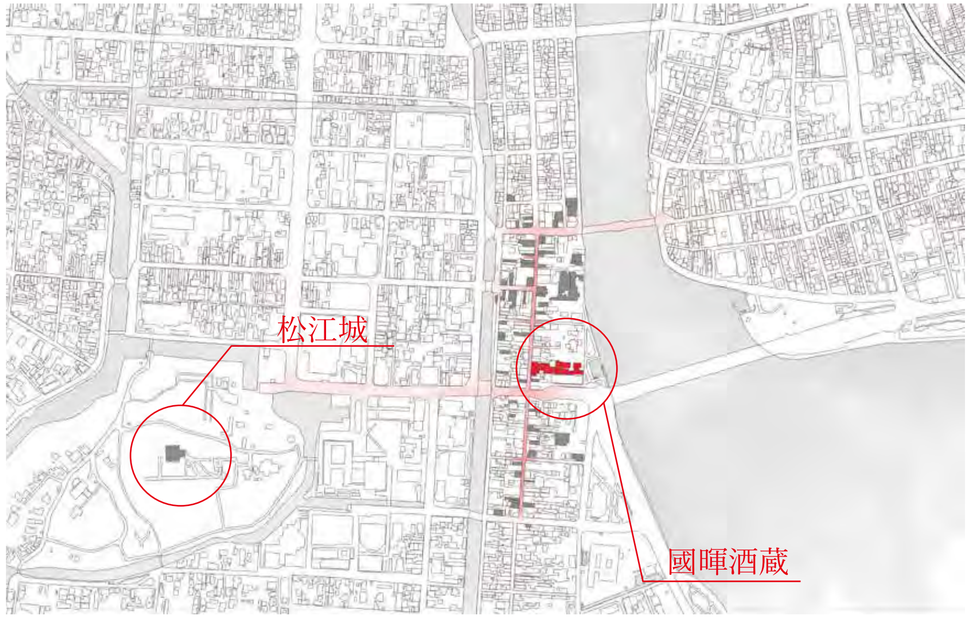
日本酒造りの再興と街の記憶のアーカイブ

Projects	**Diploma Project**
Programs	Factory, Resturant, Garally, Guest Room
Location	島根県松江市末次本町
Year	2021
Grade	学部４年
Duration	2month
Award	広島平和祈念卒業設計展 2021　優秀賞 JIA 全国学生卒業設計コンクール　出展作品

土地の記憶を色濃く写す日本酒と、日本酒造りで地域に愛された「國暉酒蔵」。
新事業ウイスキー造りと共に、日本酒造りを再興し、
同時に酒蔵のリノベーションによって、まちの記憶をアーカイヴする資料館を設計する。
まちの記憶をまとった本建築は、地域商店街との関係の核となり、
次第にその関係性の輪は波及していく。



日本酒は「記憶」である。その土地で丁寧に育った米と水、蔵に住みつく酵母から成り、
杜氏による土地ならではの「技」をもって唯一無二の味が造られる。
できた酒はまちの神事や祭りで呑み交わされ、地域の記憶として還元されていく。



松江城下町としての痕跡が色濃く残っている「末次商店街」の一画を対象敷地とした。

國暉酒蔵と松江の風景 < 昭和 20 年代 >

水辺と煙突、城の織りなす風景は、人々に愛され続け、松江市民の心象風景となっていた。

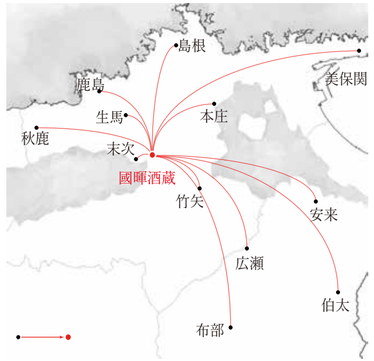
國暉酒蔵 変遷　（記憶の集積）

< 江戸 >　廻船問屋・藍染業・水産

< 明治 >　松江藩より蔵を譲り受け、
酒造業へ

< 昭和 >　戦後 GHQ より業務停止令
その後 15 の酒造が國暉に統合

< 令和 >　酒蔵は廃業の危機に面し、
2020 年ウイスキー会社が買収



酒蔵の統合

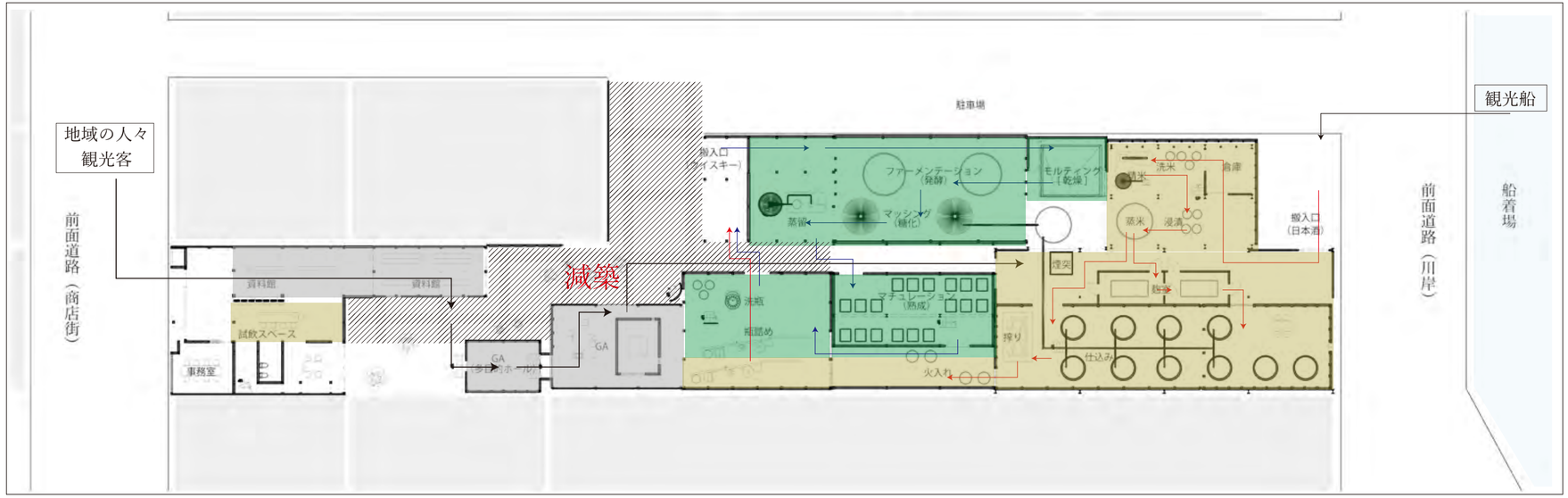
「國暉酒蔵」は町人街としてファサードに江戸時代からの風情を残している。
また、水辺から見た「國暉」の壁面は松江のシンボルでランドマークとなっている。

様々な年代における構造体や用途を失った遺産。
これらは日本酒造りで刻まれてきた「記憶」である。
これらをアーカイヴとして残しながら、次なるレイヤーとして新たな用途や構造体を加えることで記憶を再興する。

- 日本酒造り
- 新事業：ウイスキー造り
- 街の資料館・GA

↓

Museum としてまちに開く



日本酒造り、ウイスキー造り、街の資料館・GA の３つのプログラムから建築を構成し、持続可能なプロジェクトを目指す。さらにこれら全体を Museum として街に開き、地域・観光客との関係を構築する。
点在する町家で販売している様々な工芸品を展示することは、「國暉酒蔵」への来訪客にとって商店街を歩くきっかけとなり、「末次本町」の再興につながる。
改修後の酒蔵は新たなまちの風景となり、商店街と共に地域の暮らしに溶け込んでいく。

全体計画

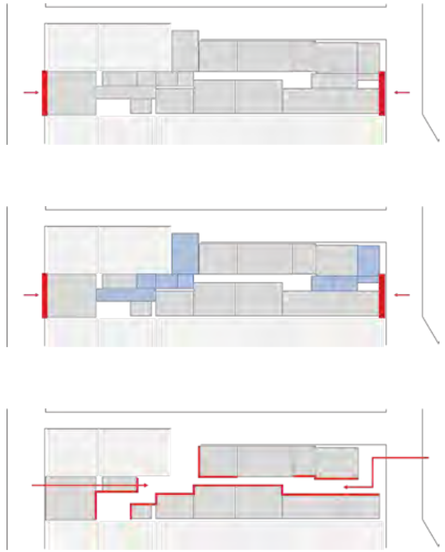
ファサードで街とつながる（既存）

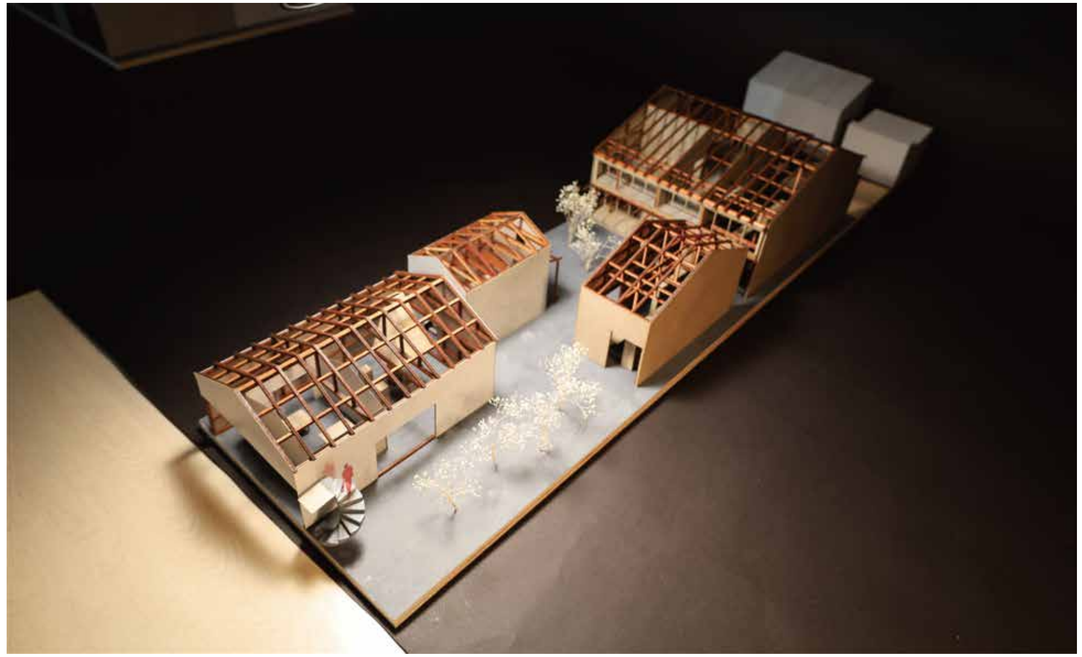
↓

減築

↓

蔵内部へ街の生活を引き込む





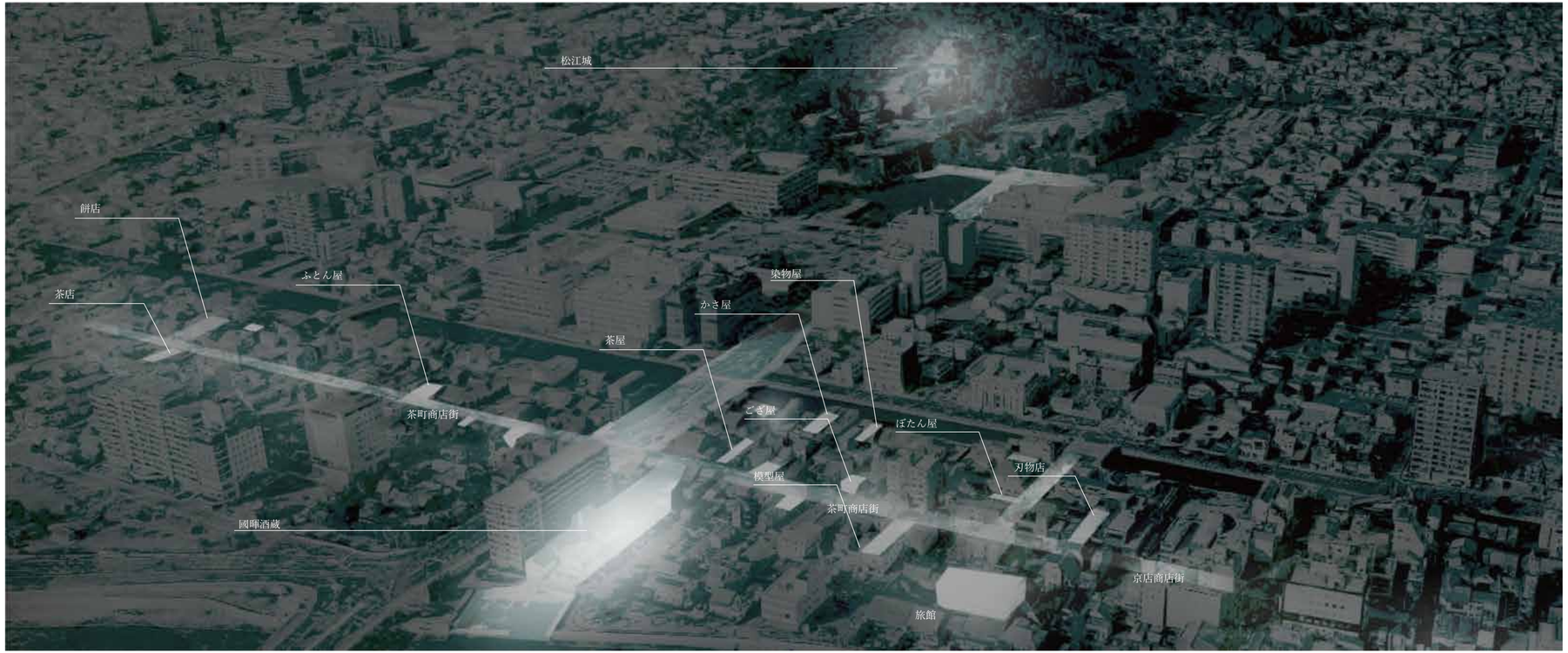
地域計画

本敷地は城下町の「記憶」が色濃く残っている。

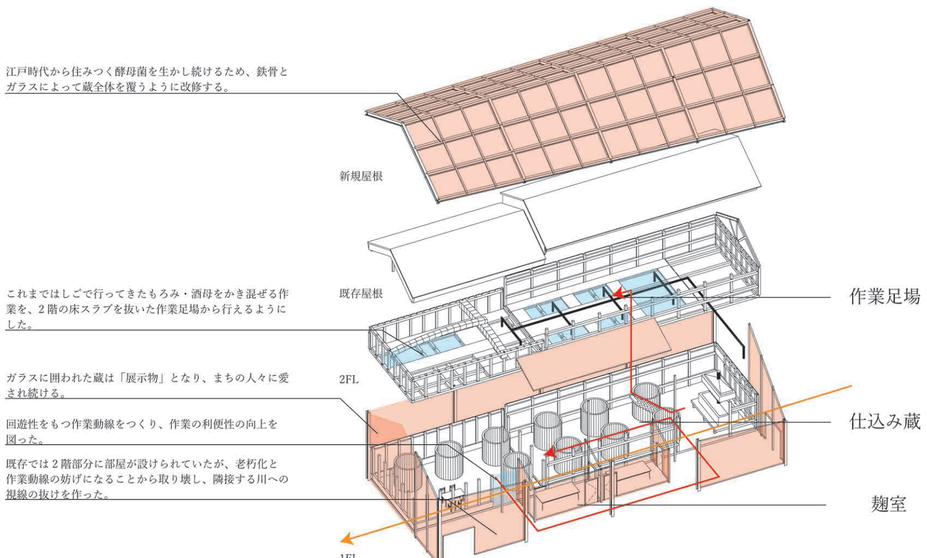
点在する町家で販売している様々な工芸品を展示し、

「國暉酒蔵」の来訪客へ商店街を歩くきっかけをつくり、

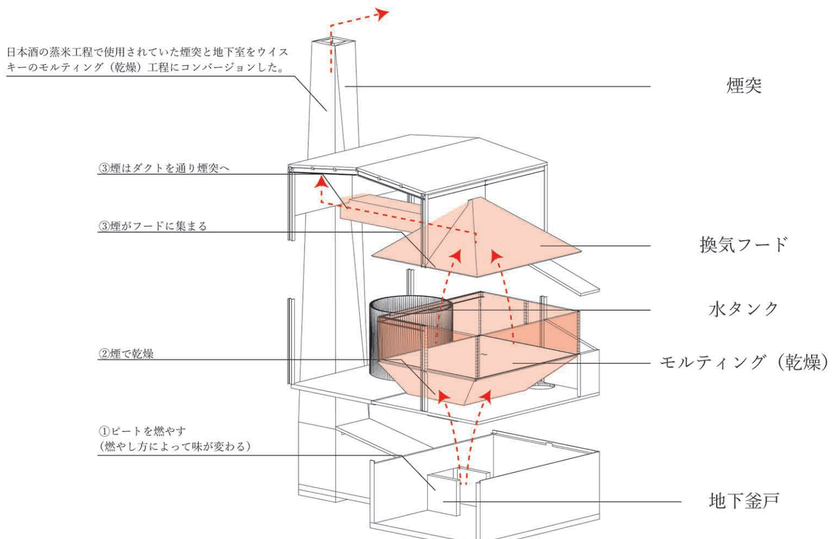
「末次本町」の再興につなげる。



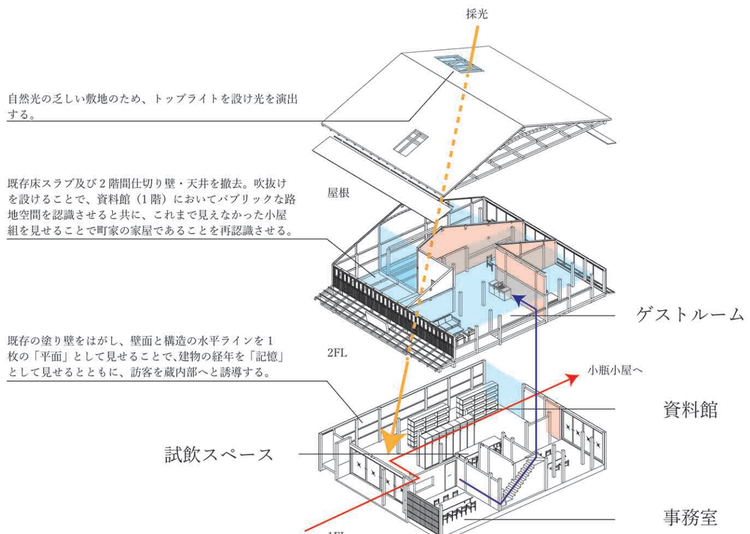
＜日本酒仕込み蔵の保存＞


江戸時代から住みつく酵母菌を生かし続けるため、鉄骨とガラスによって蔵全体を覆うように改修する。
新規屋根
既存屋根
これまではしごで行ってきたもろみ・酒母をかき混ぜる作業を、2階の床スラブを抜いた作業足場から行えるようにした。
作業足場
2FL
ガラスに囲われた蔵は「展示物」となり、まちの人々に愛され続ける。
回遊性をもつ作業動線をつくり、作業の利便性の向上を図った。
仕込み蔵
既存では2階部分に部屋が設けられていたが、老朽化と作業動線の妨げになることから取り壊し、隣接する川への視線の抜けを作った。
麹室
1FL

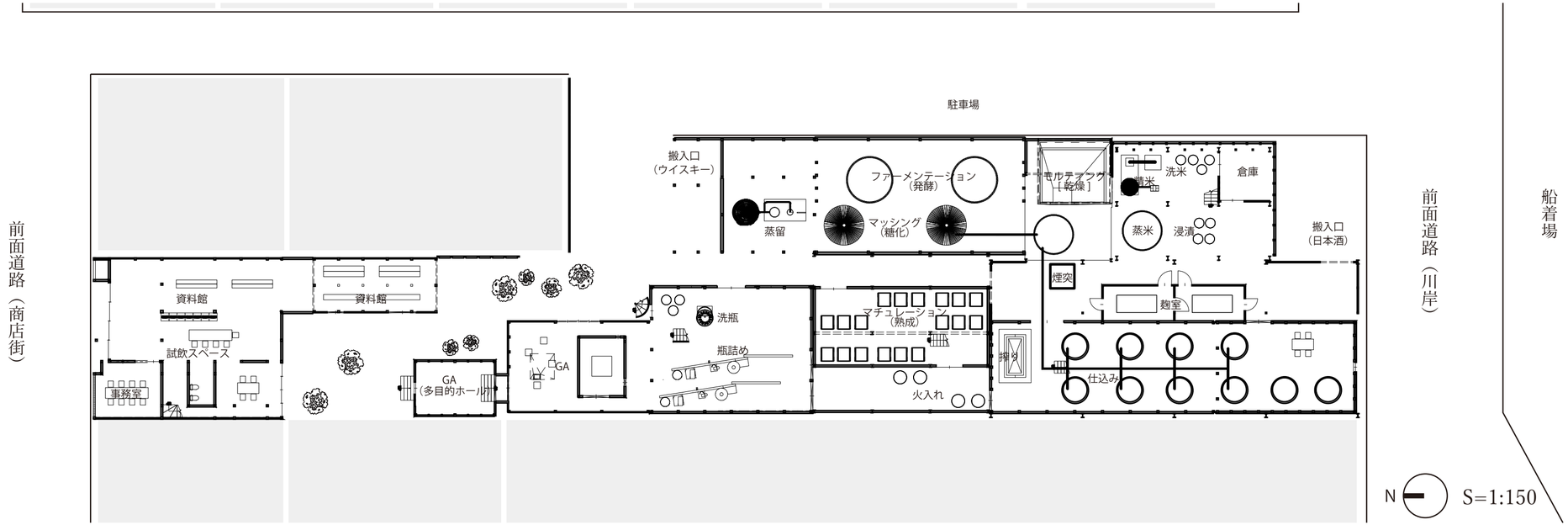
＜煙突・地下暖炉の再活用（ウイスキー乾燥工程）＞



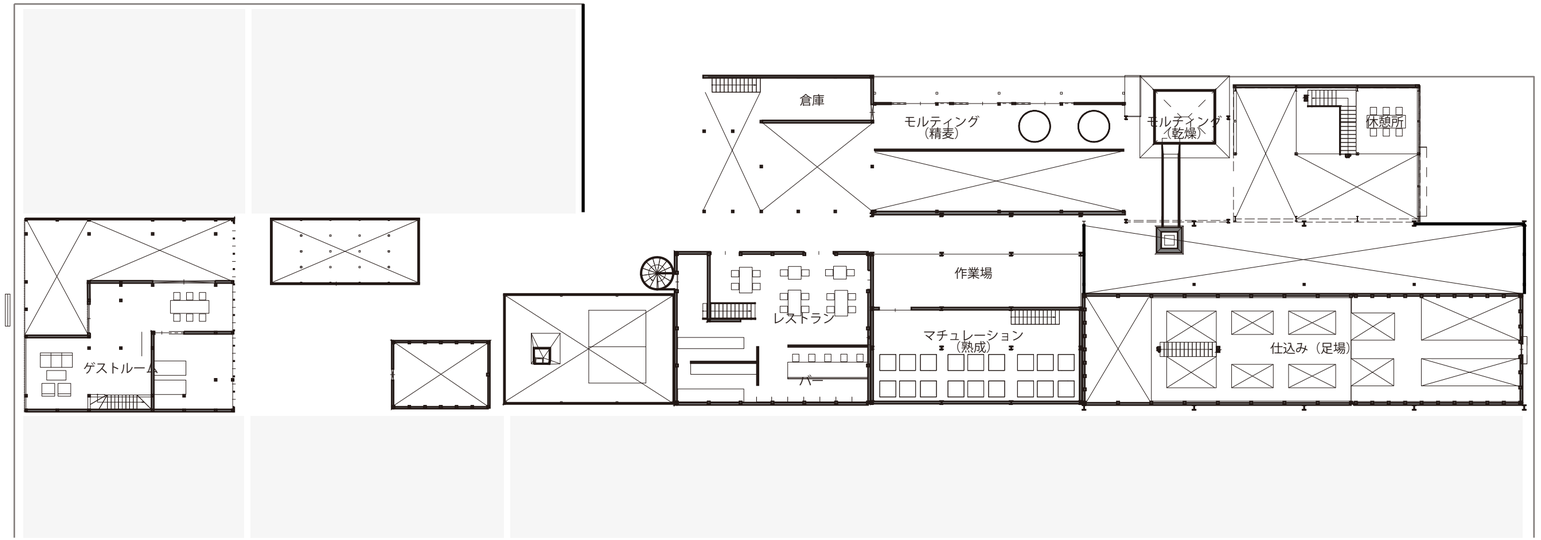
＜通り土間の再解釈（GA）＞

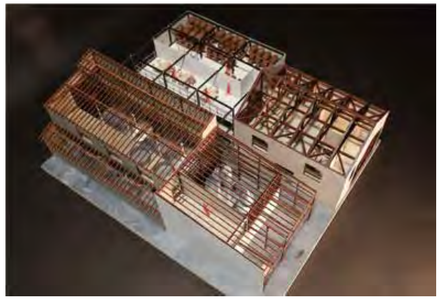

採光
自然光の乏しい敷地のため、トップライトを設け光を演出する。
屋根
既存床スラブ及び２階間仕切り壁・天井を撤去。吹抜けを設けることで、資料館（1階）においてパブリックな路地空間を認識させると共に、これまで見えなかった小屋組を見せることで町家の家屋であることを再認識させる。
ゲストルーム
2FL
既存の塗り壁をはがし、壁面と構造の水平ラインを１枚の「平面」として見せることで、建物の経年を「記憶」として見せるとともに、訪客を蔵内部へと誘導する。
小瓶小屋へ
資料館
試飲スペース
事務室
1FL

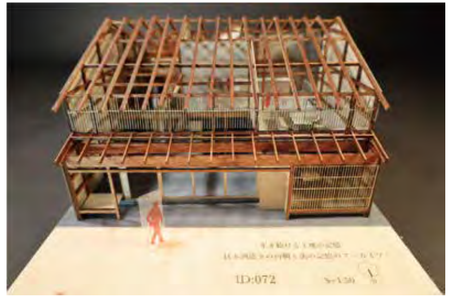
1階平面図


駐車場
搬入口
（ウイスキー）
ファーメンテーション
（発酵）
蒸留
マッシング
（糖化）
モルティング
［乾燥］
精米
洗米
倉庫
蒸米
浸漬
搬入口
（日本酒）
煙突
麹室
仕込み
搾り
マチュレーション
（熟成）
火入れ
洗瓶
瓶詰め
GA
GA
（多目的ホール）
資料館
資料館
試飲スペース
事務室
前面道路（商店街）
前面道路（川岸）
船着場
N
S=1:150

2階平面図


倉庫
モルティング
（精麦）
モルティング
（乾燥）
休憩所
作業場
レストラン
マチュレーション
（熟成）
バー
仕込み（足場）
ゲストルーム
N
S=1:150




ID:072

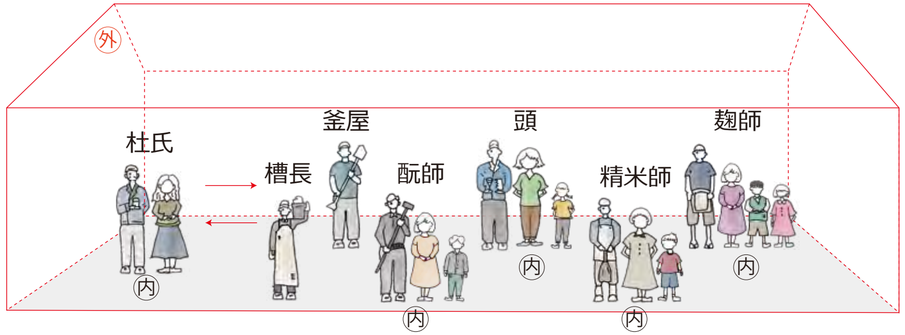
乾杯

酒蔵を中心としたつながりの提案

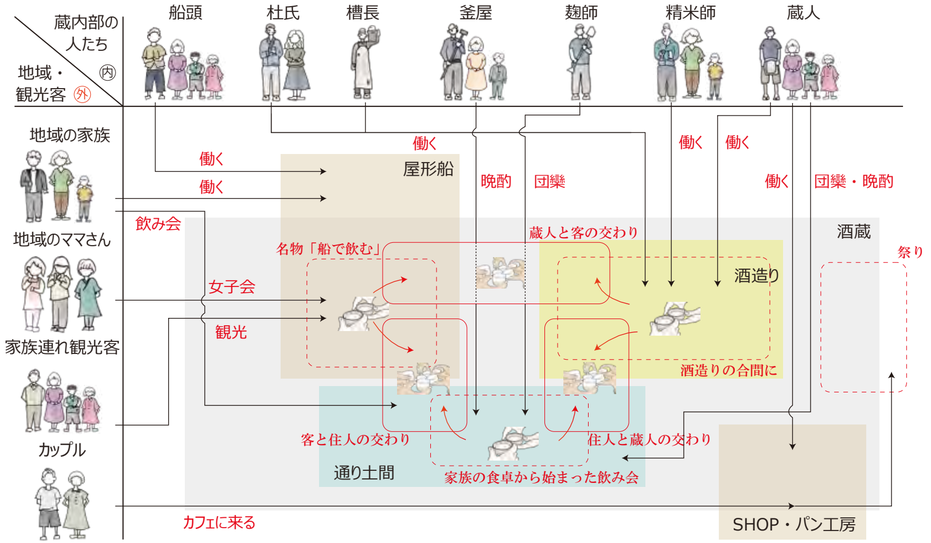
Projects	2020年　日本建築学会設計競技 「外とのつながりを持った新しい住まい」
Programs	Housing, Factory, Shop, Resturant
Location	島根県松江市末次本町
Year	2020
Grade	学部4年
Duration	2month
Award	日本建築学会中国支部入選

酒蔵と水辺が織りなす景色をもつ松江市の國暉酒蔵。
かつてこの地は船が行き交う水上交通の要であり、人々の活気で溢れていた。
しかし近年、かつての原風景は失われ、國暉酒蔵も存続の危機に面している。

酒蔵の中に川の水を引き込むことで原風景を再生し、
地域に愛されている地酒を守るため、酒造りと蔵人の住まい・屋形船を結びつけ、
さらに多くの人達に愛される環境を設計した。



蔵人達には様々な役割がある。空き蔵の中に役割に応じた配置で住まいを構え、
それぞれの家族が同じ酒蔵の中で生活することでつながりを生む。
家族の関係を内、酒蔵内での家族同士のつながりを外と捉え、酒造りと生活の二重のつながりを生み出す。



蔵内では、様々な場所で様々な人たちが乾杯する。
屋形船、住まいの中の通り土間、酒造りの場で始まった「乾杯」が輪を広げ、輪と輪が重なり合って
生まれる「つながりの合奏（ハーモニー）」を提案する。乾杯の輪が日常的に発生する空間を設計した。

屋形船が酒蔵を照らす

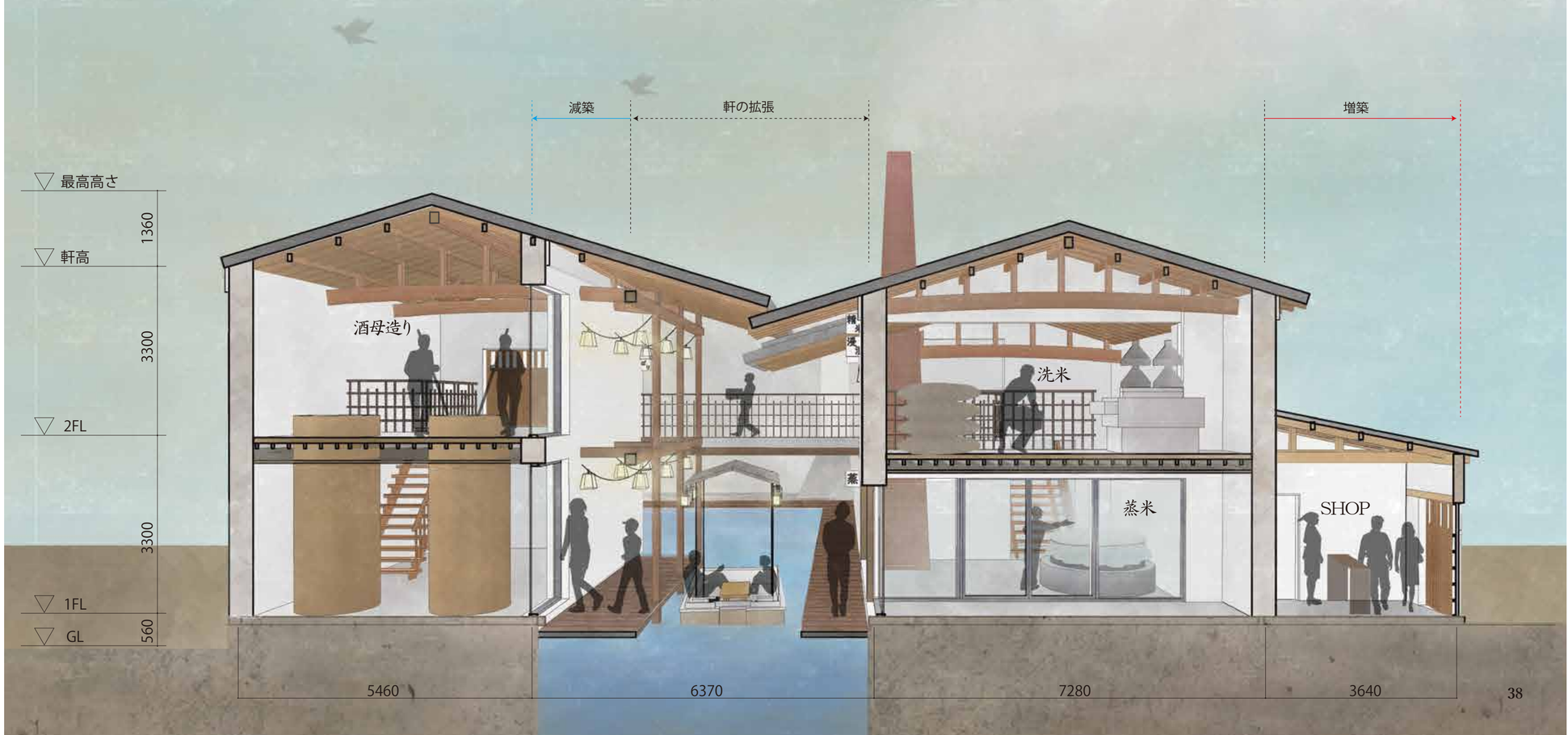
①屋形船が酒蔵を照らす
船は光と賑わいを連れて蔵へ入り、船の到着を蔵人に知らせる。

▼

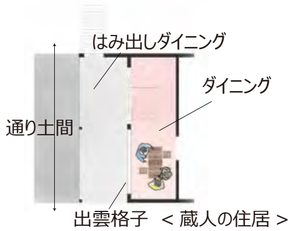
②酒蔵２階とも繋がれる
船を進め、乗客は一丸となって屋根を上げ、２階の蔵人に合図を送る。

▼

③酒蔵と屋形船の乾杯
酒造りの魅力に酔いしれた乗客たちは、住民と盃を交わす。



通り土間ににじみ出る晩酌の輪



①家族で晩酌（ダイニング）

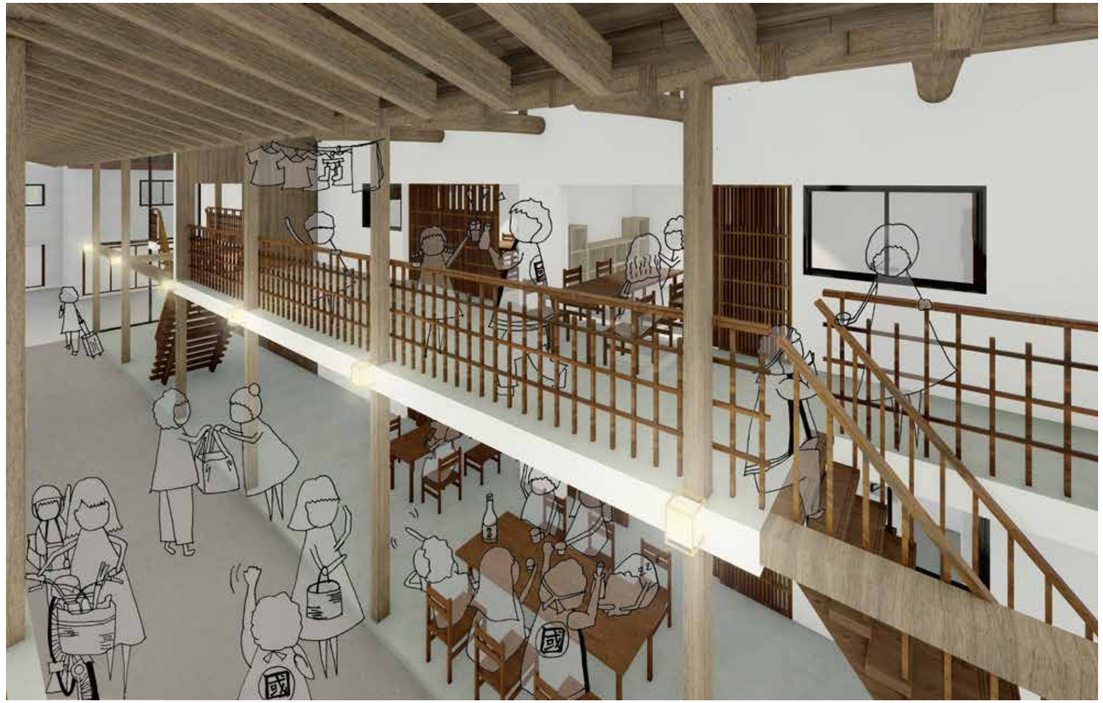
蔵人の毎日の楽しみは晩酌。
家族と楽しい団欒のひと時を過ごす。

②仲間が入ってくる（はみ出しダイニング）

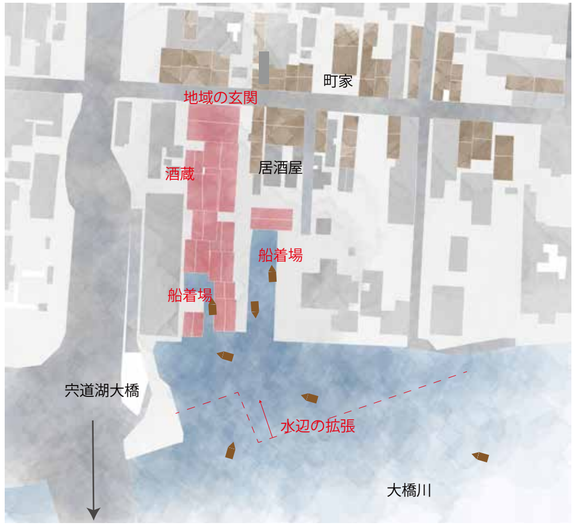
通りがかりの仲間が格子越しに話しかけてくる。机を外に出し、晩酌の輪が広がる。

③「宴会」になる（通り土間）

いつしか晩酌の輪は宴会レベルに発展し、毎晩いろんな家の前の通り土間で宴会が自然発生的に行われる。

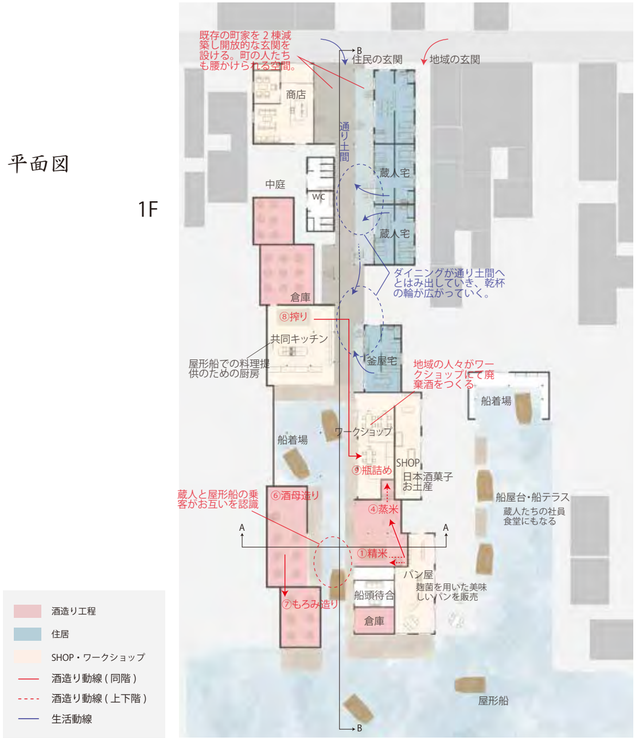


配置図

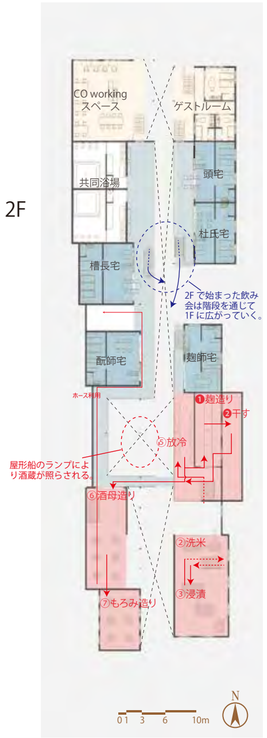

町家
地域の玄関
酒蔵
居酒屋
船着場
船着場
宍道湖大橋
水辺の拡張
大橋川

平面図

1F


既存の町家を２棟減築し開放的な玄関を設ける。町の人たちも腰かけられる空間。
住民の玄関
地域の玄関
商店
通り土間
中庭
WC
蔵人宅
蔵人宅
ダイニングが通り土間へとはみ出していき、乾杯の輪が広がっていく。
倉庫
⑧搾り
共同キッチン
屋形船での料理提供のための厨房
釜屋宅
地域の人々がワークショップにて麹菓酒をつくる。
船着場
船着場
ワークショップ
SHOP
⑨瓶詰め
日本酒菓子お土産
蔵人と屋形船の乗客がお互いを認識
⑥酒母造り
④蒸米
船屋台・船テラス
蔵人たちの社員食堂にもなる
A
A
①精米
パン屋
麹菌を用いた美味しいパンを販売
⑦もろみ造り
船頭待合
倉庫
屋形船
B
B
酒造り工程
住居
SHOP・ワークショップ
酒造り動線（同階）
酒造り動線（上下階）
生活動線

2F


CO working スペース
ゲストルーム
共同浴場
頭宅
杜氏宅
槽長宅
2F で始まった飲み会は階段を通じて 1F に広がっていく。
配師宅
麹師宅
ホース移動
❶麹造り
❷干す
⑤放冷
屋形船のランプにより酒蔵が照らされる。
⑥酒母造り
②洗米
③浸漬
⑦もろみ造り
0 1 3 6 10m
N

通り土間展開図

住居
建物の奥に水が見える！楽しそう！
そうね、ちょっと覗いてみようよ！
なんか下の階、楽しそうじゃない？
今日はお鍋にするよー！
お？楽しそうだね～！入れてよ！
ただいまー！
仕込み蔵・住居
こうやってお酒って出来ていくんだ！
おお、見られてる！今日も頑張ろう！
蔵の中に船で入るなんて、楽しいね！
0
1
3
6
10m

INNOVATIONAL VILLAGE

Projects	第23回 ぐっとずっと。エネルギア住宅作品コンテスト「未来につながる愉しい住まい」
Programs	Housing
Location	島根県松江市白潟町
Year	2019
Grade	学部3年
Duration	1month
Award	佳作

現代の住宅において、血縁以外のコミュニティに帰属している例は稀有である。

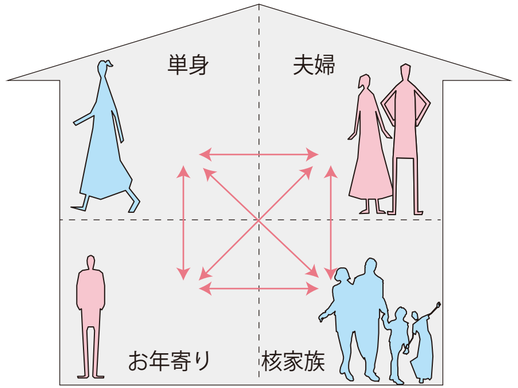
ただ「住む」という行為のためだけに建築が存在し、コミュニティが希薄化している。

本設計では多世代・多様な家族がコミュニティレベルで交じり合って住むことのできるモデルを提案した。

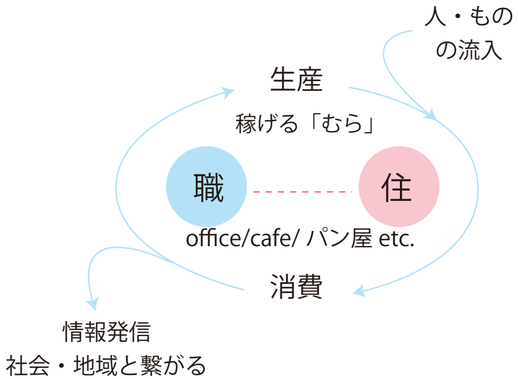
さらに、住宅以外の機能も兼ね備えることにより、コミュニティがサスティナブルに循環する。

住民同士、地域の人同士など、複雑な関係性を構築し、まちにイノベーションを起こす。

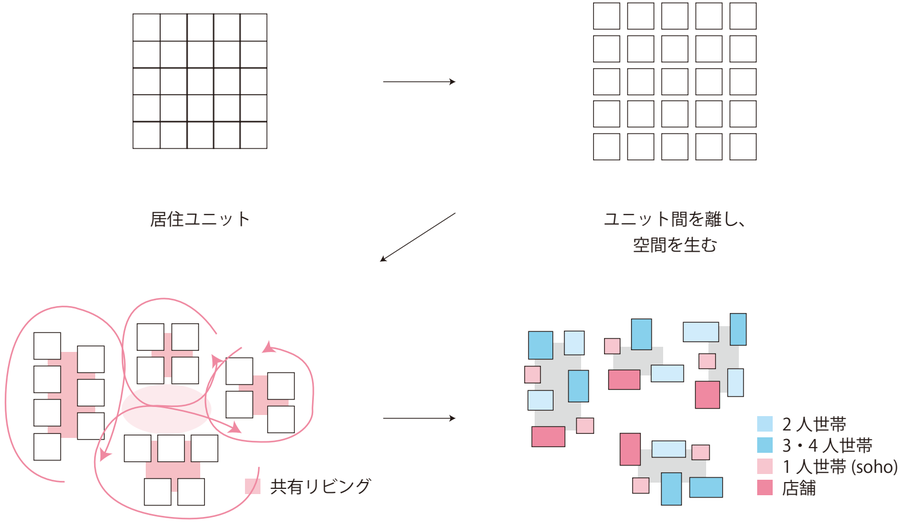
敷地は松江市天神町。
隣接する白潟天満宮は昔より人々に慣れ親しまれている神社である。
敷地を一体として考え、参道の先をこの中心広場にすることで、まちのコミュニティスペースのコアができる。



多世代、多様な家族が同じ屋根の下で暮らす。
ほかの家族の気配を感じながらの生活は様々なつながりを生み、
設計者の想像を超えた住民主体のアクティビティが行われる。



職住近接によって、まちの機能をこの「むら」に集約する。
コンパクトに設計された循環型の集合住宅はまちの人たちにとっても魅力的な場所となり、
さびれつつあるまちの活性化につながる。



居住ユニット

ユニット間を離し、
空間を生む

外部に回遊性と中心性をつくる
内部に common スペースをつくる

ユニットにスケールを与える
内外部に有機的な空間が生まれる

1階平面図

生活と芸術の融合

ル・コルビュジエ・センターの設計過程からみた生活空間の構成

Projects	卒業論文
Year	2020
Grade	学部４年
Outcome	日本建築学会近畿支部研究報告書　投稿 日本建築学会学術講演会　投稿 国際会議「ACHDHT 2021 OSAKA」　投稿

ル・コルビュジエ・センター

ル・コルビュジエ・センターの制作過程による立面構成からみた生活空間と芸術空間の融合

正会員　○古澤太晟*
正会員　千代章一郎**

ル・コルビュジエ　ル・コルビュジエ・センター　生活
芸術　パビリオン

1.　はじめに

1. 1. 背景と目的

本稿はル・コルビュジエ・センター Pavillon d'exposition ZHLC (Maison de l'Homme) (1964-1965)を事例とし（以下ZHLC と略記）、ル・コルビュジエ Le Corbusier の建築制作における生活要素と芸術要素に着目することで、ル・コルビュジエの生活に対するビジョンを明らかにする。

筆者らはすでに平面構成の分析から、ル・コルビュジエがスロープの計画を中心として生活空間と芸術空間の融合について検討を繰り返していたことを明らかにした[注1]。本稿では特に立面構成に焦点を当て、ル・コルビュジエがどのように生活空間を表現したのかを明らかにする。

1. 2. 研究の方法

ル・コルビュジエの『全集』、『集成』及び『スケッチ集』を一次資料として用い、平面構成の分析により明らかになった以下の制作区分と対応させ、立面構成の分析を行った。

素案（61 年 6 月 18 日）
草案（61 年 7 月 28 日～61 年 8 月 8 日）
　Ⅰ期（61 年 7 月 28 日～8 月 2 日）
　Ⅱ期（61 年 8 月 3 日～4 日）
　Ⅲ期（61 年 8 月 4 日～8 月 8 日）
基本計画案（61 年 12 月 12 日）
実施計画案（65 年 6 月 23 日）

2.　制作過程からみた立面構成の変遷

2. 2. 素案（61 年 6 月 18 日）

1961 年 6 月、ル・コルビュジエは手帖の中で、住居とアトリエをスロープによってつなげるスケッチを描く。ル・コルビュジエは傘上屋根の下に住居 logis とアトリエ atelier を左右対立した構図で描き位置関係を検討した[注2]。

2. 3. 草案（61 年 7 月 29 日～61 年 8 月 5 日）

1961 年 7 月 28 日から 8 月 8 日までの間、ル・コルビュジエはカップマルタンの休暇小屋 Cabanon de Le Corbusier にて ZHLC のプロジェクトの土台となる 24 枚のスケッチを描き、数多くのスタディを行う。

2. 3. 1. Ⅰ期（61 年 7 月 29 日～8 月 2 日）

Ⅰ期では住居 logis とアトリエ atelier の境界部分が拡張され、中間領域が設けられた[注3]。

2. 3. 2. Ⅱ期（61 年 8 月 3 日～8 月 4 日）

図 1　ル・コルビュジエによる
「226/226/226 の蜂窠状空間」の検討（61 年 8 月 4 日）[注4]

Ⅱ期ではプランが反転し、東に住居 logis、西にアトリエ atelier が配置された。「モデュロール」による 226cm の寸法及び「226/226/226 の蜂窠状空間」とみられる幾何学の素描が住居 logis 及びアトリエ atelier の 2 階壁面に確認できた（図 1）。

2. 3. 3. Ⅲ期（61 年 8 月 4 日～8 月 8 日）

図 2 ル・コルビュジエによる「波動ガラス壁面」の検討
（61 年 8 月 4 日）[注5]

Ⅲ期では、1 階住居 logis 及びアトリエ atelier 部分に「波動ガラス壁面」が採用され、壁面と生活空間の関係性について検討された（図 2）。

2. 4. 基本計画案（61 年 12 月 12 日）

図 3　ル・コルビュジエによる「波動ガラス壁面」の検討
（61 年 12 月 12 日）[注6]

1961 年 12 月 12 日には第 1 次計画案が提出され、市議会より建築許可申請が下りる。

立面における「波動ガラス壁面」が 2 階部分にまで及び、建物の南北壁面の片側全体を覆う計画となる（図 3）。

2. 5. 実施計画案（65 年 6 月 23 日）

図 4　ル・コルビュジエによる色彩パネルの検討
（65 年 6 月 23 日）[注7]

1965 年 6 月 23 日、実施計画案が提出された。「226/226/226 の蜂窠状空間」が再び採用され、それに伴い、壁面には 1.13m×2.26m の色彩パネルおよびガラス壁面が計画され、ファサードや空間内部の様態が大きく変化した（図 4）。

3. おわりに

以上、本稿で検討された ZHLC の立面構成の変容及び平面構成との対応について表 1 に示す。これらの形態変容から、以下の結論が導き出せた。

1)　「226/226/226 の蜂窠状空間」を導入することで、鉄骨により区切られた寸法グリッドの中で生活空間及び芸術空間の壁面をデザインしようと試みた。
2)　「波動ガラス壁面」を導入することにより、生活機能として換気・採光を確保することに加え、視覚的に芸術要素と触れる契機を与えた。
3)　色彩パネル及びガラス壁面を取り入れることで、建物の内外から壁面を知覚できるとともに、内部からはガラス壁を通して切り取られた周辺景観をのぞむことができ、知覚する芸術の対象は壁面から周辺景観へと広がっていった。

以上、ル・コルビュジエは壁面のデザインの検討を続けることによって生活空間における芸術要素を建築形態へと昇華させ、芸術の範囲を建物内部から周辺景観まで広げていったことが明らかとなった。

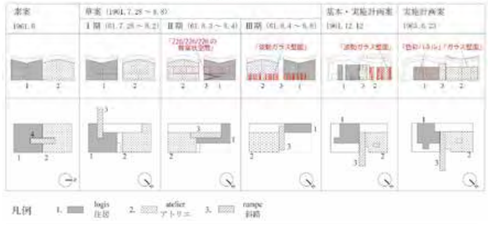
参考文献

1)　*Le Corbusier Plans volvs.16*, Foundation Le Corbusier, Echelle-1, 2005 (Echelle-1, Fondation Le Corbusier 編著, LE CORBUSIER PLANS, 建築資料研究社, 2005)
2)　Catherine Dumont, Tim Benton, *Le Pavillon De Le Corbusier Pour Zurich*, denkmalpflege und bauforschung, eth zurich, 2013

注釈

注 1) 古澤太晟, 千代章一郎「ル・コルビュジエ・センターの制作過程による平面構成からみた生活空間と芸術空間の融合」, 日本建築学会近畿支部研究報告集, No.61, 2021 年 6 月
注 2) *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, Fondation le Corbusier, Paris, The Architectural History Foudation , New York, Editions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1982, p.759
注 3) Le Corbusier PLANS, FLC21131L 61.6.18
注 4) 前掲, FLC21106, 61.8.4
注 5) 前掲, FLC21107, 61.8.4
注 6) 前掲, FLC21084, 61.12.12
注 7) 前掲, FLC21093, 65.6.23

表 1　ZHLC における立面構成の変容



*　島根大学大学院自然科学研究科　修士課程
**島根大学　教授・博士(工学)

*　Shimane Univ., Graduate School of Eng.
** Prof., Shimane Univ., Dr. Eng.

The Creation of Pavillon d'exposition ZHLC and the Relationship between Life Space and Art Space by Analyzing Elevation

FURUSAWA Taisei, SENDAI Shoichiro

ル・コルビュジエ・センターの制作過程からみた平面構成における生活空間と芸術空間の融合

正会員 ○古澤太晟*1　同　千代章一郎*2

9. 建築意匠・歴史—5. 西洋近代建築史
ル・コルビュジエ，ル・コルビュジエ・センター，生活，芸術，パビリオン

1.　はじめに

1. 1. 背景と目的

図 1　ル・コルビュジエ・センター[注1)]

本稿はル・コルビュジエ・センター Pavillon d'exposition ZHLC (Maison de l'Homme) (1964-1965)を事例とし（以下 ZHLC と略記）、ル・コルビュジエ Le Corbusier の建築制作における生活要素とそれに関連する要素に着目することで、ル・コルビュジエの生活に対するビジョンを明らかにする。

ZHLC はル・コルビュジエの最後の住宅作品である。また、同時に住宅をコンセプトとして建設したパビリオン建築である。住空間と展示空間が混在しており、ル・コルビュジエの思考の中で、生活のイメージに芸術の要素が入り込んでいると推測することができる。

1. 2. 研究の方法

ZHLC の設計過程の分析に用いた一次資料は以下の通りである。

①Le Corbusier, Willy Boesiger, *Le Corbusier & Pierre Jeanneret œuvres completes*, vols.8, Les Editions d'Architecture Artemis, 1928-1969 （以下『全集』と表記）

② *Le Corbusier Plans vohs.16*, Foundation Le Corbusier, Echelle-1, 2005（以下『集成』と表記）における 75 図面

③*Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, Fondation le Corbusier, Paris, The Architectural History Fondation , New York, Editions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1982 における 12 枚の素描

これらの一次資料から、まず空間構成要素を抽出し、生活要素と芸術要素に分類する。（第 2 章）。次に空間構成の変化から制作過程を分節した上で、空間の主題の変容について分析し（第 3 章）、ZHLC の生活要素と芸術要素の位置づけについて明らかにする。

1. 3. ZHLC に関する既往研究について

ZHLC について、上述の資料を用いた最も包括的な研究として、Catherine Dumont, Tim Benton の著作がある[注2)]。本稿の主題に関して、ZHLC のプロジェクト始動以前からの建設経緯と制作過程について、プロジェクトに関連した人々を含めたル・コルビュジエにとって外在的な出来事の変遷を整理することによって、建築形態の生成について明らかにしている。特に構造のシステム、寸法体系、色彩の観点からル・コルビュジエの「諸芸術の綜合」のテーマについて言及した。しかしこれらの言及についてル・コルビュジエが残した各スケッチ・図面における空間の意味内容について焦点を当てた分析は限定的であり、ル・コルビュジエにとって内在的な思考の発展があったことを詳細に読み取ることはできていない。それに対して本稿は、『全集』及び『集成』における図面・スケッチにおける平面の分析から ZHLC の生活要素と芸術要素について具体的に抽出し、これらの融合の様態について明らかにする。

The Creation of Pavillon d'exposition ZHLC and the Relationship between Live Space and Art Space

FURUSAWA Taisei, SENDAI Shoichiro

2.　空間構成要素の抽出と分類

各図面・スケッチを分析した結果、プランニングとして主に以下の 5 種類の要素を抽出することができた。

1. 住居 logis
2. アトリエ atelier
3. テラス terrasse
4. スロープ rampe
5. 階段 escaliers

これらの 5 要素を分類すると、生活機能を含む 1. 住居 logis を生活要素と捉えることができた。また、2.アトリエ atelier、4.スロープ rampe は展示空間を構想するために配置された、芸術要素と捉えることができた。そして、3.テラス terrasse と 4.スロープ rampe は外部空間を構成していた。

3.　制作過程からみた生活空間と関連要素の変遷

3. 1. ZHLC の制作過程

資料の精査によって、生活空間の構成から設計過程を大きく以下の 4 期の時系列に区分することができた。また、より詳細な変化について言及するため、さらに草案の設計過程を 3 期に細区分した。

素案（61 年 6 月 18 日）
草案（61 年 7 月 28 日～61 年 8 月 8 日）
　Ⅰ期（61 年 7 月 28 日～8 月 2 日）
　Ⅱ期（61 年 8 月 3 日）
　Ⅲ期（61 年 8 月 4 日～8 月 8 日）
基本計画案（61 年 12 月 12 日）
実施計画案（65 年 6 月 23 日）

3. 2. 素案（61 年 6 月 18 日）

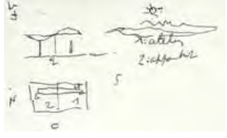


図 2　ル・コルビュジエによる ZHLC のブランスケッチ（61 年 6 月 18 日）[注3)]

1961 年 6 月、ル・コルビュジエは手帖の中で、住居とアトリエをスロープによってつなげるスケッチを描く（図 2）。これが、ZHLC のプラン構想の始まりであり、南側の居住部分から北側の展示部分まで、南北に横断するようにスロープが配置された。これ以後の構想において、ル・コルビュジエは住居 logis とアトリエ atelier を常に左右対立した構図で描き、位置関係を検討している。

3. 3. 草案（61 年 7 月 29 日～61 年 8 月 5 日）

1961 年 7 月 28 日から 8 月 8 日までの間、ル・コルビュジエはカップマルタンの休暇小屋 Cabanon de Le Corbusier にて ZHLC のプロジェクトの土台となる 24 枚のスケッチを描き、数多くのプランのスタディを行う。この期に、前述の 5 つの空間要素が現れた。

3. 3. 1. Ⅰ期（61 年 7 月 29 日～8 月 2 日）

図 3　ル・コルビュジエによる平面プランの検討（61 年 8 月 2 日）[注7)]

Ⅰ期では東に居住部分、西に展示部分のアトリエ、そして南にテラスが配置される[注4)]。屋根の寸法が 14m から 11.84m に縮小され、それにより平面プランについても 2.26m と 3.66m の 2 種類のモデュールを用いた検討がされており、これまでの作品で度々検討されてきた「モデュロール」の適応がみられる[注5)]。これ以降、スケッチでのプランスタディはこのグリッドを基に進められた。

また、スロープが配置、検討され始める。①建物内部に配置されるパターン[注6)]と②90 度回転し建物南部の外部に張り出すパターンの 2 パターン（図 3）が検討された。①ではスロープは住居部分とアトリエ部分の境界からアクセスし、建築的プロムナードとして主に住居部分を知覚することができる。それに対し②では、住居部分からのみのアクセスで、主に外部空間を知覚させるプロムナードを構想していた。

3. 3. 2. Ⅱ期（61 年 8 月 3 日）

図 4　ル・コルビュジエによる平面プランの検討（61 年 8 月 3 日）[注8)]

Ⅱ期ではアトリエと居住部分の左右の配置について検討され、東西が反転する（図 4）。

また、スロープは東西方向に住居とアトリエを渡すように配置されていた。

3. 3. 3. Ⅲ期（61 年 8 月 4 日～8 月 8 日）

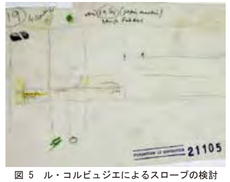


図 5　ル・コルビュジエによるスロープの検討（61 年 8 月 4 日）[注9)]

スロープに関して、居住部分に焦点を当てた素描の中で、再び 90 度回転させるか否かの比較検討を行っていた。ただし、南北に配置されたスロープはⅠ期とは異なり建物内部に収まっている（図 5）。

3. 4. 基本計画案（61 年 12 月 12 日）

図 6　ル・コルビュジエによる平面プランの検討（61 年 12 月 12 日）[注10)]

1961 年 12 月 12 日には第 1 次計画案が提出され、市議会より建築許可申請が下りる。プランは図面として表現されており、スケッチで構想されていた草案と比較してより具体的な構想を捉えることができた（図 6）。この際、西にアトリエ、東に居住部分が配置され、草案Ⅰ期のプランに近い配置となる。

スロープは北の中央部である居住部分とアトリエ部分の境界に位置し、外部空間に接した構成となっていた。

3. 5. 実施計画案（65 年 6 月 23 日）

図 7　ル・コルビュジエによる平面プランの検討（65 年 6 月 23 日）[注11)]

1965 年 6 月 23 日、実施計画案が提出された（図 7）。この期においてはまず、「226/226/226 の蜂窩状空間」が採用され、これまでのグリッド構成とは異なり、全て 2.26m を基準にしたプランが構成・修正された。

スロープのほとんどが外部へ張り出すようになり、内部空間においてスロープへのアプローチ空間が住居とアトリエの中間領域となった。

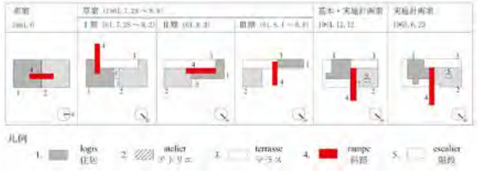
4.　おわりに

以上、本稿で検討された ZHLC のプランの変容については表 1 のごとくである。これらの形態変容から、以下の結論が導き出せた。

1) 生活機能を含む住居 logis が、芸術要素であるアトリエ atelier と共に傘上屋根の下部に計画された。
2) 住居とアトリエの境界部分に配置されたスロープによって生活空間と芸術空間の融合を試みたが、構想途中においてスロープは住居にのみ接続し、ル・コルビュジエの中で融合の手法について葛藤がみられた。
3) 最終的にスロープは境界部分に配置され、ル・コルビュジエが 2 要素の融合について解決できたかは不明である。

以上より、ル・コルビュジエはスロープの計画を中心として生活空間と芸術空間の融合について検討を繰り返していたことが明らかとなった。

表 1　ZHLC における生活空間と関連要素の変容（筆者作成）



*　島根大学総合理工学部建築・生産設計工学科
**　島根大学学術研究院環境システム科学系 建築デザイン学コース・教授・博士（工学）
*　Student, Dept. of Architecture and Production Design Engineering, Interdisciplinary Faculty of Science and Eng., Shimane University.
**　Professor, Architectural Design Course, Institute of Environmental Systems Science, Academic Assembly, Shimane University, Dr. Eng.

参考文献

1) Le Corbusier, Willy Boesiger, *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres completes*, vols.8, Les Editions d'Architecture Artemis, 1928-1969
2) *Le Corbusier Plans vohs.16*, Foundation Le Corbusier, Echelle-1, 2005 (Echelle-1, Fondation Le Corbusier 編著, LE CORBUSIER PLANS, 建築資料研究社, 2005)
3) Catherine Dumont, Tim Benton, *Le Pavillon De Le Corbusier Pour Zurich*, denkmalpflege und bauforschung, eth zurich, 2013
4) Flora Samuel, 加藤淳夫監訳,『ディアーネルから見るル・コルビュジエの建築思想』, 丸善株式会社, 2009
5) 千代章一郎, 盛原潔丸,「感性空間としての＿コルビュジエのパビリオン建築」, 日本感性工学会論文誌, Vol.9, No.2, 2010, pp.205-213
6)

注釈

注 1) 出典:Le Corbusier, Œuvres *completes*, vol.8, p.145 (吉阪隆正訳: p.139)
注 2) Catherine Dumont, Tim Benton, *Le Pavillon De Le Corbusier Pour Zurich*, denkmalpflege und bauforschung, eth zurich, 2013
注 3) 出典：*Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, p.759
注 4) Le Corbusier PLANS, FLC21131C, 61.7.31
注 5) 前掲, FLC21131A, 61.7.30
注 6) 前掲, FLC21111, 61.8.2
注 7) 出典：前掲, FLC21131G, 61.8.2
注 8) 出典：前掲, FLC21108, 61.8.3
注 9) 出典：前掲, FLC21105, 61.8.4
注 10) 出典：前掲, FLC21078, 61.12.12
注 11) 出典：前掲, FLC21089, 65.6.23

PROJECT

菊竹清訓　山陰と建築

島根県立図書館・武道館　模型製作プロジェクト

Exhibition	菊竹清訓　山陰と建築
Place	島根県立美術館
Term	2021.1.22 - 3.22
Team	島根大学　建築論・千代研究室
Producing Time	3month (2020.8 - 11)
Position	Sub-Leader